

# 阿賀 に生きる

焼いた魚も泳ぎ出す

コトナ

絵に描いたダルマさんも歩き出す

エロコバコバ



Photo by Masaji Iizumi Design by Racco

●製作  
阿賀に生きる製作委員会  
(代表・大熊 孝)  
●監督  
佐藤 真

- 撮影 小林 茂
- 録音 鈴木彰二
- 撮影助手 山崎 修
- 録音助手 石田 秀英
- 助監督 熊倉 克久
- スタイル 村井 勇
- 音楽 経 麻 朗
- 監音 久保田 幸雄
- 録音協力 菊池 信之
- ナレーター 鈴木 彰二
- 題字 小山 一 則
- 企画編集 高橋 辰雄
- スーパー文字 サザンウインド
- タイトル撮影 クイトル 撮影
- 編集所 青葉 公 社
- 現像所 横浜シネマ現像所
- フィルム 日本コダック
- 機材提供 各務 洋一
- 東京映像センター 掛須 秀一 (シエイフィルム)
- 高岩 仁
- 柳沢 寿男
- 菊池 信之
- 青木 基子
- 上映協力 オルターレートジャパン
- シエイフィルム
- 協力 シクロ
- スコフル工房
- ポレボレタイムズ社
- 配給 阿賀に生きる東京上映委員会
- 配給協力 株シネセゾン

## ヒワイさもほどほど健全、ニッポンの根っ子

——川は川のことばで話し、田も風も木も。この土地で、人は魂を駆り立てながら、年とっていく。——



# 記録映画「阿賀に生きる」は 若きスタッフたちの葛藤と成長の記録である

監督 佐藤 真

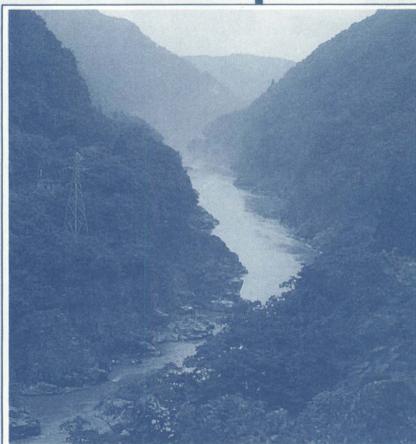
三年前に撮影を始めた時、阿賀野川は死に絶えた川だと思っていました。58もの発電所で開発し尽くされて、新潟水保病の舞台になった川です。往時の川漁や舟運の自慢話を核に撮れば良いと、川筋を歩き始めたのです。

しかし、「阿賀の家」と名づけた川筋の家に暮らし始めてみると、阿賀野川が次第に大きく生き生きと輝き始めて見えてきました。私達の家の囲炉裏には炭がおこされ季節ごと川魚や山の幸、川漁の自慢話が日夜賑やかに花咲くのです。長い間、同じ川を見つめ続けてくると、今まで気付かなか

いくつもの季節とともに生きられたかけがえない時の厚みを、二時間にもみたないフィルムにそつとまぎれこませることに成功した佐藤真の『阿賀に生きる』が、静かに、だが決定的に何かを変容せしめる力をみなぎらせてつ、いま視界に浮上する。野心と野心の不在が同じ表情におさまるかにみえる大胆な繊細さで見るとの心を捕えるこの傑作は、傑作という言葉が想像させがち排他的な孤立感からは最も遠いところで、ともすれば途絶えがちなコミュニケーションの回路を周到によりがえらさせてみせる。

## 「阿賀に生きる」は、静かに、だが決定的に何かを変容せしめる力をみなぎらせて、いま発進する

映画評論家 蓮實重彦



った川音や鳥の声、川の表情の豊かな変わりように目を見はらされます。三年の共同生活は、阿賀の豊かさを充分に体感させてくれるものでした。その中で、川筋の人々は、等しく阿賀の恩恵の中に暮らしてきたことに気づき始めました。

私達は、田んぼ仕事を手伝ったり、酒を飲み交しながらその「暮らし」まるごとを

うまでもなく、撮られることで微妙に変化してゆく彼らの表情と、恐れと驚きとともにそれを見つめつつ、みずからの変貌を受けとめてゆくスタッフとの間のコミュニケーションの進展ぶりが、この映画のあらゆる画面に脈打っている。そればかりではない。川の流れと風の向きと船の船頭とのコ

フィルムに収めたい衝動にいつもかられていました。面白くて可笑しくてホロリとさせられる。そんな日常を丁寧にも撮ることで、それを壊してきたものの残酷さがあぶり出しになればと思ってきました。私達の映画の主役は自分の仕事と生き様に誇りを持ち続けて、見事な年のとり方をした人達です。また深く阿賀と暮らしてきた故に、一方で新潟水保病の被害者家族でもあるのです。

この映画は、十四の瞳と耳で阿賀野川を見つめ続けてきた七人のスタッフの力の結晶です。またそれは、製作委員会に集った無償の市民の無数の瞳に支え続けられた結果でありました。

そして、この三年間の記録はまた、逆に阿賀に生きる人々に見つめ返されることで変わってきた私たちスタッフ七人の葛藤と成長の記録でもあるのです。

ミニコミュニケーション、山間の小さな田の泥と年老いた農夫夫妻の足や手とのコミュニケーション、目の前で見事な川船へと変貌してゆく材木と大工道具と病に冒された手とのミニコミュニケーション、白の中の餅米と振りおろされる杵とのミニコミュニケーションなどが、安易な共感を超えた厳しい現実として生ましくフィルムに定着されている。

そのさまを揺るぎない時間の流れの中で見据えようとする佐藤真とその仲間たちの姿勢は、見ている者の生の変容をも迫らさずにはおかない。八〇歳をすぎた初めて弟子を持った船大工の寡黙な振舞いと、教えを請う年かかさの棟梁の身振りとの息づまるコミュニケーションから、船と川と人との奇跡のような和解が成立したように、この映画の製作と撮影と上映とに関わる者たちとの間にも、不意の蘇生に似た変容の瞬間が生きられねばならない。

『阿賀に生きる』は、いま、その瞬間の到来に向けて発進したところだ。

★この映画は、新潟の人々を中心につくられた、阿賀に生きる製作委員会の呼びかけのもとに全国1,400余人のみなさんから寄せられたカンパによって製作されました。 ●お問い合わせ先▶ 阿賀に生きる東京上映委員会 〒167 東京都杉並区井草3-22-3-101 ジェイ・フィルム内 TEL.03-3399-0504 FAX.03-3399-9478

# '93 2月20日 土より 凱旋ロードショー!

## 3月5日 金まで

上映時間	連日	12:00	2:15	4:30	6:45
------	----	-------	------	------	------

当日料金 ●一般1,600円/学生1,300円/中学生1,200円/小人・シニア1,000円(税込)

キネマ旬報・92年度ベストテン 第3位入賞 その他各賞受賞!



キネカ大森 JR大森駅東口・西友大森店5階 ☎03-3762-6000

